

# 墨田の花火



串田 久子

紫陽花の季節になった。我が家の庭にも何種類かの紫陽花を植えていて、毎年6月に入るとあちこちでピンクや青や紫、そして白い紫陽花たちが、憂鬱になりがちな梅雨の季節に私を楽しませようと、競って咲き始める。

その中でも、私が一番好きな紫陽花が“墨田の花火”といわれる白い大きな額紫陽花だ。

額になる花びらが 白い八重になっていて中心は爽やかな薄いブルー。まるで夏の夜空に打ち上がった青い花火のよう

に見えるので“墨田の花火”と名付けられたのだろう。

数年前の“母の日”のプレゼントに、私はこの“墨田の花火”の大きな鉢植えを母に贈ったことがあった。母はこの珍しい紫陽花をたいそう気に入ってくれて、自宅の表の庭にそれを植えたのだった。そしてそれから毎年元気に花を咲かせては母を楽しませてくれた白い紫陽花。

今年も6月の声を聞いた我が家の庭の“墨田の花火”も「ほら、今年も私を見てちょうだい！」とでも言うように、大きく美しい白い花を咲かせた。たぶん、鹿児島の実家でも“墨田の花火”は可憐に咲いているに違いない。それでも、「まあ綺麗に咲いたわね！」と喜んで花に語りかける母の姿はない。

“墨田の花火”だけでなく、母が丹精

込めて庭のあちこちに植えた花たちは母に褒められることもなく、寂しい想いでそれぞれ花を開いているのだろう。可哀そうに。花たちも可哀そうだと思うのだが、私はその美しく可愛い花たちを見ることができない母を可哀そうに思う。

心が綺麗な母だったから、きつと天国へ昇っていて、この世のものではないからこそ眩しいくらい美しい花畑の中で、今は幸せに暮らしているのだろうが、私は母に鹿児島庭に咲く花たちを見せてあげたいと心から思うのだ。

一年前の母の葬儀の時、葬儀社の方々が驚くほどの数の花が葬儀会場に届けられ、祭壇の脇にびっしりそのスタンド花が並べられた。花が好きだった母のために、父や私はできるだけ沢山の花で祭壇を飾ってあげたかったので、ご厚意で届

けてくださった本当に多くのスタンド花に、私たち親子はとても有難く思い大感激した。しかしながらそれでもやはり、あんな風に突然逝ってしまった母を想うと悔しくて悔しくて仕方がなかったのが本音だ。

庭の“墨田の花火”を眺めては、ああもう母に花を贈れないのだと“母の日”を恨めしく思う。そして母の「ありがとう！」と言う可愛い声が受話器から聞こえないのも悲しい。

こんな風に、私はこれからも毎年梅雨を迎えて“墨田の花火”に母を恋しく想うのだろうか。そして、鹿児島父もまた、庭の母の植えた花たちが咲く度に、「母に見せたい」と嘆くのだろうか。

## 追記

この原稿を依頼されたのが6月だったのでその時思いついたことを書き綴ってしまったが、後から考えれば発刊される真夏に梅雨の話で申し訳なかったかもしれない。どうぞお許しください。



額紫陽花



久子ファミリー、長男一家と次男を交えて

## 入来籠の風景

二〇〇三年、知覧武家屋敷群、出水武家屋敷群に次いで、鹿児島県で三番目の国の伝統的建造物群保存地区（武家町）に選定されました。



庶流入来院家の茅葺門



玉石垣の屋敷割り



史跡清色城跡  
(入来小学校)